

# 令和7年度 地域連携活動報告書

東京家政学院大学  
社会連携センター

## ご挨拶

東京家政学院大学では、建学の精神である「KVA精神」、すなわち、知識 (Knowledge) の啓発、徳性 (Virtue) の涵養、技術 (Art) の錬磨という三つの理念を中心に据え、生活者の視点で、人々の生活をよりよくするための教育と研究を推進しています。

本学の中心的学問分野である「家政学(生活科学)」は、人々の生活や地域社会との関わりの強い学問分野であり、地域との連携が不可欠です。そのため、「東京家政学院大学地域連携ポリシー」において、地域社会への貢献が、本学にとって、教育と研究に続く第三の使命であると位置づけています。

教育と研究の成果を地域に活かす活動は、本学の使命の一つとして、綿々と引き継がれてきました。本書に報告されているような地域との連携は、今後ますます重要性を増してくると考えています。そして、そのベースになる力をつけるために、学科を超えた学び、分野横断的な教育や研究を展開しています。

令和7年4月からの新しいカリキュラムにおいては、共通教育科目のキャリア科目や学部の専門科目において、地域社会から学ぶこと、地域に出て学ぶ機会を強化しました。地域との連携による経験や分野横断的な学びから、学生たちが成長することを大いに期待しています。

地域の皆様には、お力添えやご助言を賜りたく、引き続きご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

令和8年3月31日

東京家政学院大学  
学長 鷹野 景子

## 地域・社会の発展に貢献できる人材育成を目指して

令和7年度、本学町田キャンパスには「生活共創学科」・「こども教育学科」の2学科から成る「生活共創学部」が誕生しました。「生活共創学部」は、共感力・協働力・達成力を柱として、共感力では、①感じ取る力、②寄り添う力、③相互尊重力を、協働力では、①実行する力、②マネジメント力、③牽引する力を、達成力では、①面白がる力、②考え抜く力、③やり遂げる力を身に付けさせ、各学科の専門的知識・技能を身に付け、「広く地域・社会の発展に貢献できる人材育成」を目的としています。そのため、新学部のカリキュラムには、PBL (Project Based Learning) の手法を用いながら、学生が主体となって地域社会の課題やニーズに対処し持続可能な変革を促進するためのスキルを磨くことを目的とした「共創プロジェクトゼミA・B」(令和8年度開講)という新規の必修科目が配置されています。この授業をきっかけに、学生がより主体的に地域社会、文化・伝統への関心や理解を深めたり、地域社会の多様な人々と関わり協働する経験を積んだりする機会が増えれば、本報告書において今回振り返った諸活動に加えて、本学における地域との新しい連携、学生に向けた「持続可能な開発のための教育(ESD:Education for Sustainable Development)」として定着していく可能性が高く、今後に期待しているところです。

本報告書をお手に取ってくださった皆様、地域社会の一員としてそれぞれのお立場から今後の連携活動の可能性を探りながらご高覧くださいますと幸いです。

令和8年3月31日

町田キャンパス  
社会連携センター長  
新開よしみ

## 地域のなかでひと・もの・ことの価値を感じ、面白がり、その魅力を伝える ～産官学連携により、豊かな社会の実現に向けて～

日増しにあたたかさを感じ、春の気配が漂う季節となりました。新型コロナウイルス感染症が沈静化してきましたが、この経験を通して学んだことの一つが「人と人とのつながりが、いかに重要であるか」ではないかと思います。

先日、学生から「大学生のうちにやっておいた方が良いことは何でしょうか」と聞われました。大学生のうちにしかできないことはないのかもしれませんが、大学生がしやすいことはあるかと思います。アルバイトや、ボランティア活動、大学内外の他学部の人と容易に関わることができるのは、大学生の特権です。

将来のための準備とだけ思わず、目の前のことに真剣に取り組んで、その経験を今後どう活かすかが重要なのだと思います。やりたいことを探すことは勇気のいることでしょう。自分の心と対話し、自分のやりたいことに少しでも挑戦し続けることが大切です。そして、「どうして?」「これは何?」「面白い!」と小さな頃のように問いや感嘆をしつつ、多くの人をつなぐことが、大学時代の財産となることでしょう。人生で一番後悔することは、「自分がやりたいと思ったことをやらなかったこと」です。そのきっかけづくりをするのが、全教員と社会連携センターのお仕事です。

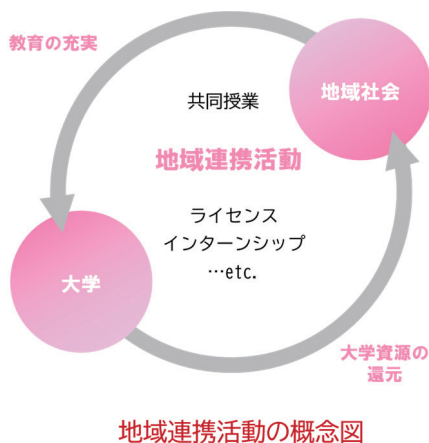
今年度も、学生たちが、地域のなかでひと・もの・ことの価値を感じ、面白がり、その魅力を伝える活動を繰り返し、報告書を発行できる運びとなりました。

本書を手にとってくださった方々にとっても、人生を豊かにするヒントがあることを願うばかりです。

今後も、関係者の皆様には、本学の地域連携活動にご支援とご協力を賜りたく、お願い申し上げます。

令和8年3月31日

千代田三番町キャンパス  
社会連携センター長  
酒井治子



## 令和7年度 地域連携活動報告書

---

# Contents

※本報告書に記載されている関係者の所属・肩書や学生の学年等は、いずれも令和8年3月現在のものです

1	オペラ公演『椿姫』の衣装デザイン・制作に参加 第1幕ヴィオレッタのサステナブルな舞台衣装	6
2	第21回さがみはら環境まつり参加 生分解性ポリ乳酸繊維布でコサージュを作ろう！	8
3	2025年 第7回ものづくりチャレンジ大作戦「革の三角コインケースをつくろう」	10
4	若年女性の便通と腸内環境をととのえる取り組み メカブでととのえる腸活プロジェクト カネリョウ海藻との連携による研究の試み	12
5	八王子産生姜をいかした健康志向かき氷の取り組み 生姜で楽しむ夏のかき氷プロジェクト 日本料理店「ゆずや」との連携によるメニュー開発	14
6	さつまいもと焼き芋でつなぐ世代間交流の取り組み 食育でつながる世代間交流プロジェクト 幼老複合施設を想定した通年型プログラムの検討	16
7	町田市保健所保健予防課との食育連携事業 まちだすいとんの普及および食育推進に関する取り組み	18
8	2025年 第7回 ものづくりチャレンジ大作戦への参加「キラキラ万華鏡をつくろう」	20
9	地域の子ども達を対象とした自然体験活動の機会の提供 『森のようちえん』	22
10	町田キャンパスが「子どもたちの学びの場」になった1日 子ども体験塾2025	24
11	神奈川県の実業への協力 かながわ消費者施策推進指針「わかりやすい版」作成に関わる意見交換	26
12	消費者教育演習における取り組み 上級生による新入生を対象にした消費者教育	28
13	江戸東京野菜“内藤とうがらし”の活用方法の検討	30
14	SDGs×地域連携活動 フェアトレード商品を活用した共創事業と食育	32
	東京家政学院大学 地域交流会2025 開催報告	34
	令和7年度 公開講座 開講報告	36

# Case 1

## オペラ公演『椿姫』の衣装デザイン・制作に参加

### 第1幕ヴィオレッタのサステナブルな舞台衣装

現代生活学部 生活デザイン学科

#### オペラ『椿姫』の舞台衣装制作

##### 1. オペラ衣装制作の背景

この衣装制作は、地域連携活動の一環として、平成25年度より公益財団法人八王子市学園都市文化ふれあい財団主催によるオペラ公演の衣装デザインおよび制作に参加しました。

同財団では、平成24年に文化庁より制定された「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」を受けて、プロのオペラ歌手や演出家と共に、社会人および小学生の合唱団と協働し、舞台芸術の普及と若手育成を目的とした市民参加型のオペラ公演を企画、実施しています。



オペラ『椿姫』のチラシ

##### 2. 『椿姫』第1幕のあらすじ

オペラ『椿姫』は、初演1853年、イタリアの作曲家ジュゼッペ・ヴェルディによる作品です。第1幕は、高級娼婦ヴィオレッタのサロンを舞台に、富豪の息子アルフレードが彼女に求愛する場面から始まります。当時の高級娼婦は、美貌だけでなく幅広い教養と、貴婦人に劣らない気品を備え、豪華なサロンに上流階級の客を招いて洗練された社交の場を主宰しておりました。紳士たちにとって、このようなサロンに出入りすることは一種のステータスでもありました。

##### 3. 演出家とのデザイン打合せ

演出家から提示されたデザイン条件は、ヴィオレッタをオペラ『椿姫』全体を通して、その時代の社会およびサロンにおける高嶺の「華」という位置づけを表現することでした。令和6年8月にデザイン画とサンプル生地、その他材料を提示してプレゼンテーションを行い、ご指導等をいただきました。

材料は、基本ドレスにDXストレッチサテン(白・ポリエステル)を用い、その上にチュールレース(シルバー・ポリエステル)を重ね、ボディ裏地には、汗による収縮を防ぐ目的で、あらかじめ水通し処理を施したチノクロス(白・20番手・綿)を使用しました。



打合せの様子 『ラ・トゥ・ラMAGAZINE』より



第1幕のドレスのデザイン画

#### 4. デザインコンセプト

ドレスの色は、ヴィオレッタの名前に由来するすみれ色の紫を基調として青紫や赤紫に加えて、シルバー、白、アイボリー、緑(葉)などの色彩構成とし、大小さまざまな造花をあしらいました。また、19世紀中頃のイヴニングドレスの様式で、裕福な女性が着用していた胸元を大きく開けたデコルテと、華やかさを強調した大きく広がったスカートのクリノリンスタイルとしました。

さらに、サステナブルな衣装として、ボディスの背面の開きには、右の写真のようにレースアップ(紐で締める方法)でバストサイズの調整を可能にし、多数のキャストによる着回しも考慮しています。また、オープンコンシールファスナー(白)を付けて着脱をしやすくしました。



#### 完成したドレスの装飾「花」の視覚的効果とヘッドドレス



オペラ公演で使用した衣装

演出家からのデザイン条件はヴィオレッタを「華」として表現することです。彼女の名から基調色を紫とし、19世紀半ばの華やかなクリノリンスタイルのドレスを制作しました。

装飾の造花240個は一つひとつ手縫いで留め、立体的な花の集積による視覚的効果を追求しました。その効果とは、花々が隙間なく咲き満ちるように見せるため、造花の下地に紫系の花柄プリント生地を敷き、実際の装飾数以上に花が広がって見えるような視覚的錯覚(錯視)効果で密度のある印象を創りました。

#### 音楽と演劇が一体化したオペラ

オペラ公演は、音楽(歌唱)、文学(脚本・歌詞)、演劇(演技)、美術(舞台装置・衣装)など、複数の芸術要素が融合して成立する総合舞台芸術です。音楽とドラマを核としながら、それぞれの要素が有機的に結びつくことで、舞台上に豊かな世界観を創出します。

本公演は、主催である八王子市学園都市文化ふれあい財団のもと、演出家、舞台監督、音楽監督、演奏者、合唱団、舞台美術、衣装、ヘアメイクなど多くの専門家が学生たちとの協働によって制作されました。



八王子市学園都市センターイベントホール(12F)にて

#### プロジェクト概要

- パートナー  
公益財団法人八王子市学園都市文化ふれあい財団
- 担当教員  
現代生活学部 生活デザイン学科教授 富田 弘美
- 学生  
現代生活学部 生活デザイン学科  
2年生 1名  
4年生 1名 計2名
- 実施期間  
令和6年4月～令和7年3月  
オペラ公演 令和7年3月16日

## Case 2

### 第21回さがみはら環境まつり参加

# 生分解性ポリ乳酸繊維布でコサージュを作ろう！

現代生活学部 生活デザイン学科

## 第21回さがみはら環境まつり参加の準備

### 1. さがみはら環境まつりの概要

東京家政学院大学生生活デザイン学科では、神奈川県相模原市との地域連携活動として、例年6月に開催されている『さがみはら環境まつり』に実行委員として参加しています。『さがみはら環境まつり』は、地域で活動する市民、事業者、大学及び行政の協働により市民の環境への関心を高めることを目的としたイベントです。

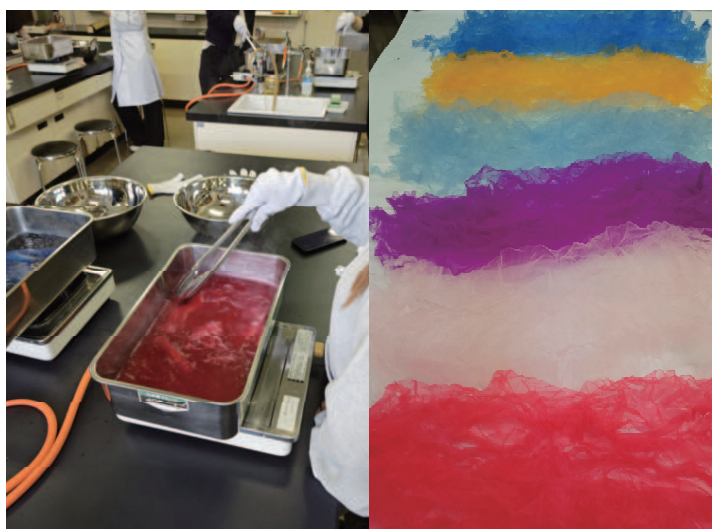
第21回さがみはら環境まつりは、令和7年6月15日(日)に、サン・エールさがみはらを会場として開催されました。主催はさがみはら環境まつり実行委員会、共催は相模原市、事務局は相模原市立環境情報センターのエコパークさがみはらです。多くの企業や団体の後援や協賛・協力を得て開催されました。実施内容は、環境保全に取り組んでいる団体のパネル展示や工作体験、ステージ企画等でした。対象は一般市民、参加費は無料で、当日の参加者は約3000人を超え、大盛況となりました。

### 2. 『ポリ乳酸繊維布でコサージュを作ろう！』体験教室の企画・運営

プラスチック製品の使用や廃棄の問題に着目したテーマです。環境配慮型の生分解性繊維であるポリ乳酸繊維を身近に感じてもらうため、知ること、触ることを目的として、ポリ乳酸繊維布を使ったコサージュ作りの体験教室を実施しました。子どもたちが楽しく体験できるように、ポリ乳酸繊維布をカラフルに染色し、簡単に縫うことができるコサージュの作り方を検討しました。更に、作り方を分かり易く説明できるように、グループに分かれ、相互に教え方の練習をしました。



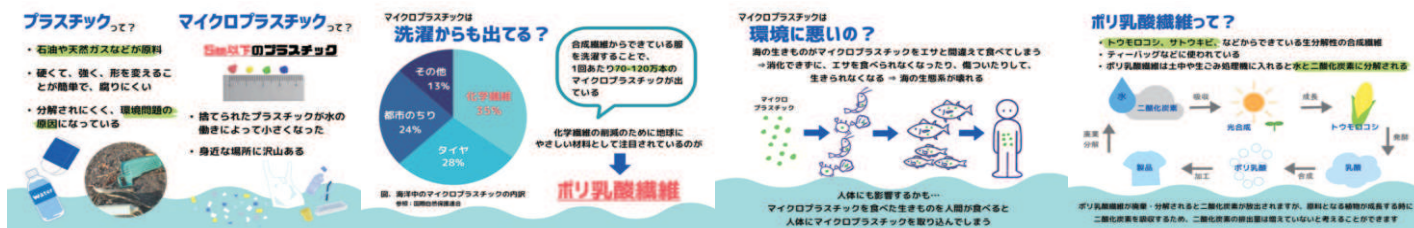
▲第21回さがみはら環境まつりポスター  
(デザイン:花田研究室&森本馨日)



▲ポリ乳酸繊維布の染色  
【コサージュ用ポリ乳酸繊維布提供:山中産業株式会社】

### 3. パネル制作

プラスチック製品の使用や廃棄の問題、環境に配慮したポリ乳酸繊維について簡単に伝えるために4枚のパネルを制作しました。



▲マイクロプラスチック問題やポリ乳酸繊維の説明パネル

### 4. ポリ乳酸繊維のスタッフウェアの制作

Bioworks Corporationのポリ乳酸繊維100%のTシャツに昇華染色により校章を染色してスタッフウェアを制作しました。

【スタッフウェア用<PlaX™> Tシャツ提供:Bioworks Corporation】

昇華染色による校章の染色 ▶



## 第21回さがみはら環境まつり当日の参加

体験教室では、パネルを用いてマイクロプラスチックの環境問題やポリ乳酸繊維の紹介をした後、好きな色のポリ乳酸繊維布でコサージュ作りを行いました。参加してくれた子どもたちは慣れない針を持って一生懸命取り組んでくれました。



▲当日の様子

### まとめ

コサージュができ上がると参加者も学生も共に嬉しそうに笑顔になったのが印象的でした。学生はこの活動を通じて、環境問題、イベント企画の運営、学外の方々、学内の多学年との協働など様々な学びの機会を得て、成長してくれたと感じています。

#### プロジェクト概要

- パートナー  
相模原市立環境情報センター  
(エコパークさがみはら)  
さがみはら環境まつり実行委員会
- 担当教員  
現代生活学部 生活デザイン学科  
准教授 花田 朋美
- 学生  
現代生活学部 生活デザイン学科  
2年生 2名  
3年生 6名  
4年生 3名 計 11名
- 実施期間  
活動期間 令和7年4月~8月  
まつり開催日 令和7年6月15日

## 2025年 第7回ものづくりチャレンジ大作戦 「革の三角コインケースをつくろう」

現代生活学部 生活デザイン学科

### 講座の趣旨

今回で第7回目となる一般社団法人ものづくり文化振興協会が主催する本事業は、ものをつくる体験が極めて少ない現代の子ども達に、ものづくりや科学・技術の楽しさ、面白さ、奥深さ、そして大切さを伝え、現代社会を豊かに生活する為に求められる意思決定力、好奇心、探究力、考える力、職業への興味関心を育てることを目的としています。その実現に向け、地域、職人、企業人、教員、学生、生徒などが指導者となり、選ぶ、みる(遊ぶ・観察・小実験・試行)、つくる(製作・試行錯誤・考える)、いかす(遊ぶ・観察・発展・職業)のプロセスを通して、地域の子ども達がより身近にもものづくりや科学・技術に触れられる環境づくりが、この事業の主旨です。

本学からは3講座の講座提供が行われましたが、本稿では町田市子どもセンターまあち会場で生活デザイン学科の学生が革の三角コインケース制作講座に講師として参加したことについて報告します。



(写真上)三角コインケースの試作見本  
(写真左)ものづくりチャレンジ大作戦ポスター  
(写真中央)ものづくりチャレンジ大作戦 開催講座一覧

本講座では、生活デザイン学科の学生がこれまでの学びを活かしながら講師となり、低学年の子どもたちも参加できるように安全性や工程を工夫し、革のコインケース作りの講座を運営しました。

これまでの経験から、作品材料や工程を細かく見直して講座内容をブラッシュアップし、参加した子どもたちが革の特徴を学びながら皮革の取り扱いやものづくりの楽しさなどを体験できることを目指して、講座の準備を行いました。

## 講座の準備

昨年と同様に牛革の三角コインケースを制作することにしましたが、これまでの経験を活かしてより完成度の高い作品を制作するための課題を洗い出し、改善策を検討しました。

①革が厚いと低学年の子どもはプレス機やハサミを動かしにくい。

⇒革の厚さを薄くし、1.8mm→1.5mmへ変更

②プレス機をかけると革が伸び、ボタンの印がずれる。

⇒プレス機をかけた後、型紙で型を取り直し、ボタンの位置を正確につけて三角形にする

③霧吹きでは革の湿潤にムラがあり成型が難しい。

⇒霧吹きによる湿潤→洗面器での浸漬で全体を湿潤する

④革の乾燥が不十分でペンの色がのらない。

⇒ドライヤーを増やすことは難しいため、1回の参加人数を6人→5人へ変更

⑤コバ処理の爪楊枝を使用した作業は低学年の子どもには難しい。

⇒へら(木製マドラー)に変更



## 当日の様子

令和7年8月10日、町田市子どもセンターまあちにて実施しました。1回5名×4回の計20名の子どもたちは、学生の説明を聞きながら、オリジナルのコインケースを制作し、革の取扱いやものづくりの楽しさを体験しました。また皮革についての説明は、パンフレットを配布することで後日に振り返りができるようにしました。学生も改めてものづくりの楽しさを知る機会となりました。



### プロジェクト概要

- パートナー  
一般社団法人ものづくり文化振興協会
- 担当教員  
現代生活学部 生活デザイン学科  
助教 佐々木 麻紀子
- 学生  
現代生活学部 生活デザイン学科  
4年生 1名
- 実施期間  
令和7年4月～8月

## Case 4

### 若年女性の便通と腸内環境をととのえる取り組み

# メカブでととのえる腸活プロジェクト カネリョウ海藻との連携による研究の試み

現代生活学部 食物学科

## 活動の概要

現代生活学部食物学科 岩本ゼミでは、海藻類の健康機能に着目し、カネリョウ海藻株式会社と連携して同社製品を用いた卒業研究に取り組みました。具体的には、「メカブ摂取がヒト腸内細菌叢、便通、およびQOLに及ぼす影響の検討」をテーマとして、「K175 三陸宮城県産めかぶかつおたれ付き」(1日35g摂取)を試験食品に用いる介入研究を計画しました。女子大学生を対象として、メカブを2週間継続摂取した際の排便状況、腸内環境指標、腸内細菌叢構成、心理的ストレスや生活の質の変化を評価することで、若年女性の便秘対策や「腸活」に資する科学的知見の蓄積を目指しました。



研究で使用を予定していた  
カネリョウ海藻株式会社のメカブ製品

## 活動の内容

本研究は、海藻に含まれる水溶性食物繊維の健康機能に着目し、特に若年女性を対象とした介入研究を計画しました。試験食品として、カネリョウ海藻株式会社の「K175 三陸宮城県産めかぶかつおたれ付き」(1日35g)を使用し、2週間の継続摂取による効果を測定する予定でした。

評価項目は、排便回数・便性状といった便通指標、腸内環境を示すインドキシル硫酸値、腸内細菌叢の構成、そして心理的ストレスや生活の質(QOL)の変化まで、多面的に検討する設計としました。これにより、若年女性が抱える便秘やストレスの課題に対し、海藻という身近な食材がどの程度サポートできるかを科学的に明らかにすることを目指しました。

しかし、「人を対象とする研究」の実施には、生命科学・医学系研究に関する倫理指針に基づいた倫理審査委員会の承認が必須となります。申請過程を通じて、研究協力者の倫理教育受講状況の確認方法や、個人情報の取り扱いなど、研究体制の整備に関していくつかの課題が指摘されました。その結果、令和7年度内に承認を得るには至らず、計画段階での終了となったものです。

## 活動の成果と学び

一方で、企業との共同研究を想定した計画立案を経験したことにより、学生は製品特性を踏まえた試験デザインの工夫(摂取期間・評価指標・検査ツールの選定など)や、公的データベースへの事前登録を含む研究の透明性確保、人を対象とする研究における倫理的配慮の重要性について学ぶことができました。本学としても、地域企業が有する食品素材を活用し、その機能性や活用可能性を科学的に検証するという点で、今後の産学官連携教育のモデルケースとなり得るテーマであると位置づけています。

本研究の計画内容やこれまでの検討事項については、八王子地域の大学等が参加する「第17回大学コンソーシアム八王子学生発表会」において学生が発表し、地域の方々や他大学の教員から関心やコメントをいただきました。また、東京家政学院大学地域交流会でも発表し、地域の方々からご意見や励ましの言葉をいただきました。



地域交流会で、メカブと腸活について発表する学生の様子



ポスターの前で、海藻と腸活について意見交換する場面

## 今後の展望

今後は、倫理審査で指摘された研究体制上の課題を整理・改善するとともに、カネリヨウ海藻株式会社と連携しながら研究計画の再構築を図っていきたいと考えています。具体的には、倫理教育の受講体制や個人情報保護の手順を明確化したうえで、小規模な予備的試験から段階的に実施し、メカブ摂取が若年女性の便通や腸内環境、メンタルヘルスやQOLに与える影響を検証していきたいと考えています。あわせて、研究で得られた知見をもとに、便秘やストレスを抱える若年層に向けた食育教材の作成や、海藻摂取の意義を発信する地域向け講座等への展開も視野に入れていきます。

### プロジェクト概要

- パートナー  
カネリヨウ海藻株式会社
- 担当教員  
現代生活学部 食物学科  
准教授 岩本 直樹  
助手 河合 彩夏
- 学生  
現代生活学部 食物学科  
4年生 2名
- 実施期間  
令和7年4月～令和8年2月

## Case 5

### 八王子産生姜をいかした健康志向かき氷の取り組み

# 生姜で楽しむ夏のかき氷プロジェクト 日本料理店「ゆずや」との連携によるメニュー開発

現代生活学部 食物学科

## 活動の概要

現代生活学部食物学科では、八王子市内の日本料理店「ゆずや」と連携し、夏季の新たな集客施策として「健康志向型かき氷メニュー」の開発に取り組みました。猛暑の影響による客足の減少や鮮魚管理の負担増といった飲食店側の課題に対し、八王子産生姜とローマ発祥の氷菓「グラッタケッカ」の発想を組み合わせることで、地域性・健康性・デザイン性を兼ね備えた新メニューづくりを目指したものです。



完成したかき氷「しょうが日和」

## 活動の内容

本研究ではまず、かき氷文化や氷菓市場の動向、地域連携による商品開発、健康志向スイーツ、夏季の外食行動に関する文献・統計資料を収集し、基礎的な知見を整理しました。続いて、令和7年4月から令和8年2月までの間に「ゆずや」を計7回訪問し、店主へのヒアリングと試作を重ねながら、夏季の来店状況やメニュー構成の課題、地域食材の調達可能性、SNSを活用した集客の可能性などについて意見交換を行いました。

かき氷メニューの試作は、「ゆずや」店内で4回、大学の調理実習室で2回、計6回実施しました。八王子産生姜の風味と辛味のバランスを調整しつつ、はちみつやレモン果汁を組み合わせた自家製シロップを開発し、氷の粒度や盛り付け、器選びにも工夫を加えました。最終的には、生姜シロップ・生姜ジャム・小豆・黒豆アイス・練乳・抹茶パウダーを組み合わせたかき氷「しょうが日和」を完成させました。



打ち合わせの様子



店内での試作の様子

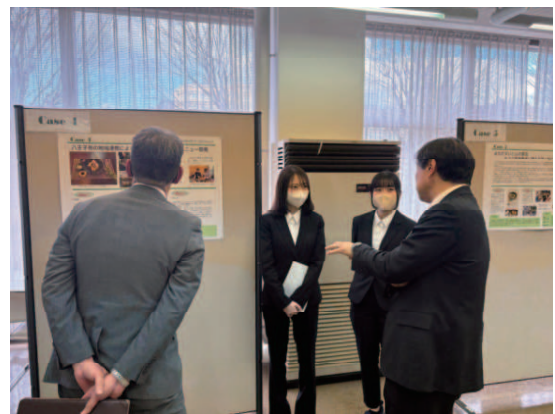
## 活動の成果と学び

完成した「しょうが日和」は、生姜の香りを活かしつつ辛味を抑えた自家製シロップと、抹茶やトッピングによる味の変化を楽しめる構成を目指して試作を重ねたメニューです。器の色合いや練乳のかけ方を工夫し、写真映えも意識した盛り付けに取り組むことで、若年層にも手に取ってもらいやすい夏季スイーツを目指しました。また、生姜を合計約9g使用することで、冷たいスイーツでありながら「体を温める要素」を取り入れた点に特徴があります。

一方で、味の好みやボリューム感、提供時の手間など、実際の店舗運営の視点からさまざまなご意見もいただきました。学生にとっては、文献調査や試作だけでは見えてこない「お店側のリアルな感覚」に触れる機会となり、新メニューを考えることの楽しさと難しさの両方を学ぶことができました。長時間にわたる試作や営業時間外の打ち合わせにもご協力いただき、大変お世話になりました。本取り組みは、大学コンソーシアム八王子学生発表会などでの発表を通じて整理し直すことができました。



地域交流会で、「しょうが日和」の開発経過を紹介する学生の発表風景



ポスターの前で、メニュー開発について来場者に説明する学生の様子

## 今後の展望

本プロジェクトで試作した「しょうが日和」については、ゆずや側とも意見交換を続けながら、今後の夏季メニューの一つの選択肢として検討していく段階にあります。実際の販売に進む場合には、価格設定や提供方法、オペレーション負担など、店舗側の事情をふまえた調整が今後の課題です。

今回の取り組みでは、地域の飲食店にとっては「学生と一緒に新しいアイデアを試す機会」を、大学側にとっては「実際の現場で学ばせていただく機会」を得ることができました。今後は、ゆずやからいただいた「さらにメニューを広げていきたい」という思いも踏まえつつ、地域の店側のニーズや負担に配慮しながら、継続的な連携とメニュー開発に取り組んでいきたいと考えています。

### プロジェクト概要

- パートナー  
ゆずや
- 担当教員  
現代生活学部 食物学科  
准教授 岩本 直樹  
助手 河合 彩夏
- 学生  
現代生活学部 食物学科  
4年生 2名
- 実施期間  
令和7年4月～令和8年2月

## Case 6

### さつまいもと焼き芋でつなぐ世代間交流の取り組み

## 食育でつながる世代間交流プロジェクト

## 幼老複合施設を想定した通年型プログラムの検討

現代生活学部 食物学科

### 活動の概要

現代生活学部食物学科では、八王子市に建設予定の幼老複合施設をフィールドとして想定し、「幼児と高齢者が食育を通じてつながる交流プログラム」の可能性について検討しました。日本全体で少子高齢化や核家族化が進むなか、三世代同居世帯の減少により、祖父母と孫世代が日常的に関わる機会が少なくなっていることが指摘されています。その結果、高齢者と子どもが互いの世代を身近に感じにくくなり、世代間の心理的な距離や地域コミュニティのつながりの希薄化が課題となっています。

こうした状況の中で、幼児施設と高齢者施設を同一敷地・建物内に併設する「幼老複合施設」は、日常生活のなかで自然な世代間交流を生み出す場として注目されています。本研究では、八王子市の地域特性や生ごみ資源循環の取り組みも踏まえながら、幼老複合施設において「食べる・育てる・捨てる」をつなぐ食育活動を媒介に、幼児と高齢者が年間を通じて関わり合うプログラムの枠組みを検討しました。食育を通じて、子どもにとっては食や環境への関心を育み、高齢者にとっては経験や知恵を活かす役割を持てる場とすることを目指した取り組みです。

### 活動の内容

本研究では、まず世代間交流や幼老複合施設、食育に関する国内外の文献・調査報告を収集し、幼児と高齢者の交流がもたらす心理的・社会的な効果や、食育活動の教育的意義について整理しました。そのうえで、幼老複合施設における既存の交流事例や、安全管理に関する指針・マニュアルを精査し、活動内容や運営体制、安全面の課題を比較・分析しました。

こうした文献的検討と、八王子市が進める生ごみ資源循環の取り組みを踏まえ、食育活動として「生ごみ堆肥づくり」「さつまいもの栽培・観察・収穫」「焚き火による焼き芋づくり」を年間を通じて行う循環型プログラムの枠組みを検討しました。プログラムでは、生ごみを堆肥として活用し、土づくりから収穫・調理・試食までを一連の流れとして捉えることで、「食べ物の循環」や「資源を大切に作る心」を育むことを目指しています。

表1 幼老複合施設における通年型食育プログラムの年間スケジュール

時期	活動内容	目的
4~5月	生ゴミ堆肥作り・苗植え	循環理解・共同作業
6~8月	水やり・つる返し・観察記録	探究心育成
9~10月	草取り・収穫準備	役割意識・自然理解
10~11月	収穫・焼き芋づくり	達成感・食材への愛着

表2 幼児・高齢者・職員による役割分担のイメージ

工程	幼児	高齢者	職員
堆肥作り	混ぜる・観察	経験共有・助言	安全管理
植え付け	苗を運ぶ・植える	植え方指示	全体指導
生育観察	記録・気付き発表	声かけ	熱中症対策
収穫・調理	掘る・包む	つる抜き・説明	焚き火管理

## 活動の成果と学び

検討の結果、幼児と高齢者が一緒に取り組む通年型の食育プログラムとして、生ごみ堆肥化からさつまいもの栽培・収穫・焼き芋づくりへとつながる活動案を具体的に整理することができました。活動の年間スケジュールや、幼児・高齢者・職員それぞれの役割分担、安全管理のチェック項目などを表や図の形でまとめたことで、今後の実践に活用しやすい形にできた点が一つの成果です。また、食育と環境教育、世代間交流を組み合わせた「循環型の食育プログラム」として位置づけたことにより、八王子市の資源循環施策とも連動しうる地域性の高いモデルとして整理することができました。

一方で、本研究は施設が未完成であるため実際のプログラム実施には至っておらず、理論的検討と計画立案にとどまっている点に限界があります。特に、焚き火を伴う活動や屋外での栽培活動は、安全管理や職員の負担といった運営面の課題が想定され、今後の実践を通じて効果や継続可能性を検証していく必要があることも明らかになりました。大学コンソーシアム八王子学生発表会を通じて、計画段階での課題整理や改善点の洗い出しにつながったことも学生にとって大きな学びとなりました。



大学コンソーシアム八王子学生発表会で説明する学生の様子



食育を通じた世代間交流の取り組みを紹介した発表会場の様子

## 今後の展望

今後は、幼老複合施設の建設や運営体制の整備が進む段階に合わせて、今回検討したプログラム案を実際の現場で試行し、幼児・高齢者双方への効果や職員の負担感、安全管理上の課題などを検証していくことが求められます。特に、焚き火を含む活動については、共通の指針づくりや事前研修を通じて、安全で無理のない形で継続できる仕組みを整えることが重要です。

また、施設内の活動にとどまらず、家庭や地域の資源循環への意識づけにつなげる工夫や、保護者・地域住民を巻き込んだ食育イベントへの発展なども今後の検討課題です。大学としても、今回の検討で得られた知見をもとに、施設職員や地域関係者と協働しながら、幼老複合施設における「食育でつながる世代間交流」の実現に向けて、引き続き支援していきたいと考えています。

### プロジェクト概要

- パートナー  
有限会社多摩ヘルパーセンター
- 担当教員  
現代生活学部 食物学科  
准教授 岩本 直樹  
助手 河合 彩夏
- 学生  
現代生活学部 食物学科  
4年生 1名
- 実施期間  
令和7年4月～令和8年2月

# Case 7

## 町田市保健所保健予防課との食育連携事業

# まちだすいとんの普及および食育推進に関する取り組み

生活共創学部 生活共創学科 / 現代生活学部 食物学科

### 令和7年8月 町田市と食育推進に関する連携協定を締結

令和7年8月1日、本学と町田市が人的・知的資源の交流と活用を図ることで、市の食育事業を推進させるとともに大学の教育・研究を充実させ、地域社会の発展に寄与することを目的として食育推進に関する連携協定を締結しました。

これまでも市の食育の課題である市民の野菜摂取量の増加や減塩の取り組みについて、学生が提案したレシピの提供等、連携した食育推進事業を実施してきました。更に食に関心が低い若い世代への普及啓発の取り組みについて効果的に実施していくため、連携協定を締結いたしました。

連携によるおもな取り組みは (1)望ましい栄養・食生活の推進に関与すること (2)食を通じて地域と繋がるための支援に関与すること (3)食に関する環境の整備に関与すること としました。

町田市地域の味であるまちだすいとんに着目し、第1弾としては、シダックス株式会社のお力をお借りして、本学学生食堂での提供、第2弾としては、本学食物学科調理学研究室の食育料理教室での実施、第3弾として、本学学園祭KVA祭でのお料理サークルによる提供を行いました。

### 望ましい栄養・食生活の推進および食に関する環境の整備に関すること

望ましい栄養・食生活の推進および食に関する環境の整備に関することとして、シダックス株式会社のご協力により7月22日・9月25日に30食限定の定食形式でまちだすいとんの提供を行いました。町田市の野菜として、生活共創学科石綱先生と学生さんが授業で育てたナスをご提供いただきました。早い時間に完売し、大盛況となりました。

町田市 Press Release  
TEL 042 724 2101  
プレスリリース [2025年8月1日] (計1枚)  
東京家政学院大学と町田市が食育推進に関する連携協定を締結します  
市は、東京家政学院大学と連携して食育推進事業を実施するため、速記協定を締結します。

- 実施の背景  
今までも、市の食育の課題である市民の野菜摂取量の増加や減塩の取組について、東京家政学院大学から、学生が考案したレシピを提供していただく等、連携した食育推進事業を実施してきました。さらに、食に関心が低い若い世代への普及啓発の取組について効果的に実施していくため、連携協定を締結いたします。
- 協定の名称  
食育推進に関する連携協定
- 協定締結日  
2025年8月1日(金)  
＜学生提供レシピ・ヤムワンセン＞
- 協定締結先  
東京家政学院大学(東京都町田市相原町2600番地)
- 協定の目的  
市と東京家政学院大学が、人的・知的資源の交流と活用を図ることで、市の食育事業を推進させるとともに大学の教育・研究を充実させ、地域社会の発展に寄与することを目的とします。
- 連携による主な取組  
(1) 望ましい栄養・食生活の推進に関すること  
(2) 食を通じて地域とつながるための支援に関すること  
(3) 食に関する環境の整備に関すること
- 実施予定事業  
(1) まちだすいとん普及に関する取組(学生食堂・学園祭での提供等)  
(2) 食育推進に関する取組(大学の講座・ワークショップ等)

■本件に関するお問い合わせ先  
保健所 保健予防課長 福島 TEL 042-725-5422



学食 7月22日 / 30食限定 /  
special lunch  
まちだすいとん 500 (税込) 円  
ごはん・小鉢(コロッケ)付

「まちだすいとん」とは？  
町田市では、「まちだすいとん」の普及により、町田の食文化としての伝統と発展を期待し、食育の推進を図ります。

特徴  
その1、望ましい栄養バランスを追求します。その2、23gは糖質の低減を実現しません。その2、長年お馴染みの定番メニューで馴染みやすく、よく食べます。その3、すいとんは、甲の酢(味噌)を買い、よくこねて、厚く引っ張ってちぎった甲の1粒をのせています。

※まちだすいとんのレシピ情報・普及に、調理学研究室(石綱先生)が関わっています。小売店は、学生が提供したレシピ、甲の酢ではなく市販品の入っています。  
東京家政学院大学と町田市保健所では「連携」によって取り組んでいきます。

## 若い世代への普及啓発の取り組み

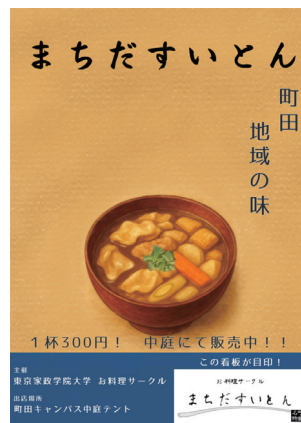
若い世代への普及啓発の取り組みとして、本学近隣の小学生を対象に行った食育料理教室のなかで、まちだすいとんを取りあげました。



参加小学生は、まちだすいとんのことを知りませんでしたが、自分たちでこねたすいとんを楽しそうにちぎって鍋に入れ、完成後の試食の際には、「いつもは食べられない野菜も食べることができた！」と教えてくれました。

## 食を通じて地域と繋がるための支援に関与すること

食を通じて地域と繋がるための支援に関与することの一環として、生活共創学科1年生のお料理サークルの学生が中心となって、KVA祭でのまちだすいとんの提供を行いました。サークルの学生は何度も試作を重ね、お料理サークルオリジナルのレシピを作成しました。



学生食堂、食育料理教室での実施、学園祭での提供を行い、まちだすいとん普及および食育推進に関する取り組みを行いました。食育料理教室に参加してくれた小学生は全員まちだすいとんについて知らず、食べられない野菜も多かったが、食べられない野菜にも挑戦するなど、普及啓発および食育推進に貢献する機会となりました。

### プロジェクト概要

- パートナー  
町田市食育推進委員会  
町田市保健所  
シダックス株式会社
- 担当教員  
生活共創学部  
生活共創学科 食科学コース  
現代生活学部 食物学科  
准教授 米澤 加代
- 学生  
生活共創学部 生活共創学科  
1年生 20名  
現代生活学部 食物学科  
3年生 2名  
4年生 4名 計26名
- 実施期間  
令和7年5月～11月

# Case 8

## 2025年 第7回 ものづくりチャレンジ大作戦への参加 「キラキラ万華鏡をつくろう」

現代生活学部 児童学科 / 生活共創学部

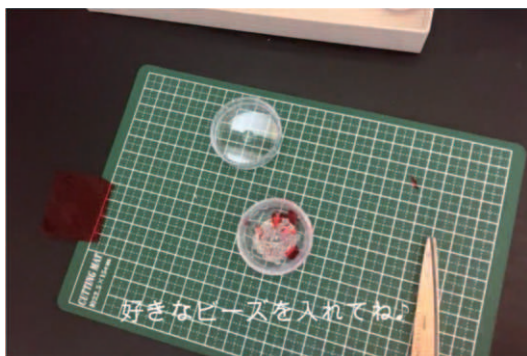
### 概要

本イベントは子ども達にもものづくりの楽しさ、面白さ、奥深さ、大切さを伝えるために、子ども達に体験する機会を創るという理念のもと毎年夏に町田市にて開催されているイベントです。オンライン含め31のブースが出展され、沢山の子ども達が参加しています。

事前準備として、ブースを紹介する1分動画と参加者に配布する手引書を作成しました。今回、1分動画では実際に作っている手元を撮影し、早回しで動画編集をしています。実際の活動では時間の関係から省いている工程も動画では載せています。手引書では、毎回作り方だけでなく、少し学びがあるよう工夫しています。今回は、万華鏡の中に入れるミラーの形(円に接する正三角形)について、1辺の算出方法を掲載しました。参加者の多くは小学校低学年の子どもですが、大きくなってからも今回経験したことを楽しめるようにと考えています。



作り方紹介の1分動画では、実際作っている様子を撮影



色々な色のビーズを使って「キラキラ」を楽しみます。

### キラキラ万華鏡をつくろう

来校 加京 (東京家政学院大学)

---

**【材料・道具】**

＜材料＞

- ・紙製の筒
- (自宅で作成する場合は、キッチンペーパーの芯やラップ芯などで代用可能)
- ・工作用紙
- ・ミラーシート
- ・色画用紙 (黒)
- ・クリアケース (筒のサイズに合うもの、クリームの詰め用ケースが使いやすい)
- ・カラーセロファン紙やビーズ

＜道具＞

- ・はさみ
- ・カッター
- ・カッターマット
- ・テープ

※その他、飾りつけに必要なもの

**【作り方】**

- 筒を適当な長さに切ります。
  - ※長すぎなければ大丈夫です。手で押った時の持ちやすさを考えて決めてください。
  - ※トイレットペーパーの芯の場合はそのままの長さで、キッチンペーパー芯やラップ芯は半分程度が目安です。
- 筒の内径を量り、工作用紙とミラーシートのサイズを決定します。
  - 図1のように筒の中に正三角形 (内側にミラーシートを糊ったり数枚の工作用紙で作成したもの) を入れるため、点線の正三角形の1辺の長さを計算します。

正三角形の1辺の長さ → 内径 × 2 × √3 (約1.732)
- 工作用紙とミラーシートを、横が2で求めた「正三角形の1辺の長さ」、縦が「筒の長さ」になるような長方形に切ります。これを3枚ずつ用意します。
  - ※横も縦も測定した値より少し小さめに切ると、筒の中に綺麗よりく入ると思いますが。

図1 正三角形の1辺の長さ

図2 正三角形の1辺の長さ

※アークスを、筒の両端用紙で覆った反対側 (写真3の半筒側) にテープで筒の内側を張り付け、筒を強くくねくね揺らしたら完成です。

写真1

写真2

写真3

※クリアケースに入れるビーズの色、大きさなどによって万華鏡の見え方が変わります。色々を試してのぞいてみてください。クリアケースの張り付け位置を工夫すれば、後からビーズを入れ替えることができます。万華鏡としてまわしてみたときの変化を楽しみだけでなく、素材自体を色々と変化させることで、何度も楽しむことができます。クリアケースに入れる素材によって見え方がどのように変化することも、是非色々工夫してみてください。

※万華鏡は、一般的には、筒の中に長方形の鏡3枚を正三角形に合わせ鏡にして入れ、その先の反対側に小さいな窓を設けてくれます。今回は、筒の代わりに100均等で手軽に入手できるラップ芯を代用し、身近な素材で作成しました。

製作方法を記した手引書も作りました。

## 当日の様子

実際の完成品を見せ、鏡の仕組み体験しながら簡単に説明します。テーブルには、すでにトレーに一人ひとりの材料を準備していますので、その中身も確認しながら製作の開始です。



鏡の仕組みも  
わかりやすく伝えます



一人ずつ道具と材料を  
トレーに載せて準備  
しておきます

昨年度の様子を踏まえ、参加は小学生以上としました。そのほかにミラーシートの事前に折り目をカッターでつけて置き、小さな子どもでも作業がしやすいよう工夫しました。



中に入れるビーズは、自分の  
好きなものを選びます。



仕上げは、自分で好きな色  
紙を選んで絵を描いてから、  
筒に貼ってもらいます。

### プロジェクト概要

- パートナー  
一般社団法人ものづくり文化振興協会
- 担当教員  
生活共創学部  
准教授 末松 加奈
- 学生  
現代生活学部 児童学科  
4年生 1名
- 実施期間  
令和7年8月10日(日)

## Case 9

# 地域子ども達を対象とした自然体験活動の機会の提供

## 『森のようちえん』

生活共創学部 こども教育学科 / 現代生活学部 児童学科

### 町田キャンパスの四季を生かした自然体験活動を企画・運営

こども教育学科・児童学科では、町田キャンパスの豊かな自然環境を活かして、大学近隣地域に居住する子ども達を対象とした自然体験活動(森のようちえん)の企画運営を行っています。活動開始から12年目となる令和7年度も、年間を通じた活動を展開しました。

#### 令和7年度「森のようちえん」実施概要

【日 程】年間を通じ月に1回、土・日曜日

【参加者】年少～小学校3年生 20名

【場 所】東京家政学院大学 町田キャンパス



#### 学生主体での企画・運営



活動内容を企画し、当日の活動を主導するのは、「プログラムディレクター(PD)」と呼ばれる役割を担う担当者の学生です。PDは各回に一人ずつ、立候補制で決定しています。事前に教員と相談しながら、季節などをふまえて活動内容を企画し、準備を進め、活動当日は先頭に立って活動を運営します。主体的に「場」をつくる経験や、人の前に立って集団をリードする経験を通じて、保育者・教員としての能力だけでなく、社会で求められる汎用的能力を鍛えています。

#### 地域子ども達・保護者・本学学生の交流の場

参加者の子ども達は5人ずつの班に分かれ、2～3名の学生とともに活動します。年間にわたって同じメンバーで継続的に活動を共にすることで、子ども同士、また学生と子どもの中に、学校や年齢を超えた繋がりが生まれているように思います。また解散時には、担任の学生から保護者に対し、その日の活動の様子や、時には小さな怪我等の報告を行います。保護者との対話のなかで子どもを預かる責任感を感じるとともに、学生達にとって自身の取り組みが地域の子育て世代に喜ばれ、社会に貢献できているという実感を得ることに繋がっているように思います。

## 令和7年度の活動内容

### 第1回「タケノコ掘り！」(4月26日)

アイスブレイキングゲームで班ごとの交流を深めたのち、保護者も含めてキャンパス内の竹林に移動し、タケノコ掘りを体験した。

### 第2回「畑づくりとスラックライン！」(5月24日)

畑を耕して土づくりを行った。また、スラックライン体験を行った。

### 第3回「さつまいもの植えつけ&班のお友達と仲を深めよう！」(6月8日)

さつまいもの苗を畑に植え付けた。また、班ごとに自由遊びを行った。

### 第4回「夏だ！水だ！水遊びだ！」(7月27日)

プールや水鉄砲を使った水遊びを行った。

### 第5回「アイスクリームと水遊び！」(8月23日)

ビニール袋と氷を使ったアイスクリームづくりと、水遊びを行った。

### 第6回「はっばのおさを作ろう！」(9月6日)

お気に入りの葉っぱを拾い、紙粘土で型どりをしてお皿を作成した。

### 第7回「お泊りキャンプ！」(10月12-13日)

テント設営、野外炊事などのキャンプ生活を体験した。

### 第8回「番外編：子ども体験塾」(11月29日)

「たき火でおイモを焼こう！」の教室を開講した。

### 第9回「みんなで焼こう、おせんべい！」(12月27日)

おせんべいの素を作り、たき火で焼いて食べた。

### 第10回「ふゆのしぜんさがし」(1月31日)

クイズなどを楽しみながら、裏山を散策した。

### 第11回「バウムクーヘンを焼こう！」(2月14日)

たき火でバウムクーヘンを焼いて食べた。 ※3月：原稿作成時点で未実施



#### プロジェクト概要

- 担当教員  
生活共創学部 こども教育学科  
現代生活学部 児童学科  
助教 佐藤 冬果  
(その他 教学補助員 1名)
- 学生  
生活共創学部 こども教育学科  
1年生 10名  
現代生活学部 児童学科  
2年生 4名  
3年生 6名  
4年生 9名 計29名  
うち各回、15名前後が参加
- 実施期間  
令和7年4月～令和8年3月  
(全12回)

# Case 10

## 町田キャンパスが「子どもたちの学びの場」になった1日 子ども体験塾2025

現代生活学部 / 生活共創学部

### 子ども体験塾2025について

#### 1. 開催の目的・概要・当日の様子

令和7年11月29日(土)、東京家政学院大学町田キャンパスにて「子ども体験塾2025」を開催しました。本事業は、独立行政法人国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金」の助成を受け、本学が有する知的・人的資源を地域社会へ還元することを目的に実施している地域連携イベントです。

当日は、近隣地域の3歳から小学生まで111名の子どもたちと、その保護者等130名が来場しました。体験活動プログラムは「創作・自然体験」「英語・算数」「スポーツ・運動」の領域から、計9つの体験教室で構成され、子どもたちは自身の興味に合わせて教室を選択して参加しました。各教室の講師には本学教員のほか、地域で活動するプロレスラーや、国内でボッチャの普及活動に尽力されている専門家の先生にもご協力いただき、学生スタッフ約60名が運営をサポートしました。

秋晴れのキャンパスでは、教室内での学びに加え、豊かな自然環境を活かした「たき火体験」や、学生手作りの縁日「おまつりひろば」も賑わいを見せました。普段の学校生活とは異なる大学というフィールドで、専門的な学びに触れた子どもたちの生き生きとした表情や、真剣に制作に取り組む姿が印象的でした。また、学生たちが子どもたち一人ひとりに優しく寄り添うことで、会場全体が温かな交流の場となりました。



▲キャンパス内のさまざまな場所で体験教室が開かれました

## 2. 各教室の活動の様子

各教室では、講師の専門性を活かしたユニークな実践が行われました。2年ぶりに復活した「青空に絵をかこう！」では、森の中に張られた透明なビニールシートをキャンバスに、子どもたちが全身を使ってダイナミックに絵の具を走らせました。また、「プロレスラーに習うからだ作り」では、地元・相原プロレスの選手から直接マット運動の指導を受け、怪我をしない体の使い方を楽しく学びました。その他、本物の火を扱う「たき火でおイモを焼こう」や、多様な素材を用いた「クリスマス飾り作り」、学生と教員が手作りで道具を準備した「夢中！熱中！算数教室」、サンタクロース宛の手紙を書いた「英語楽習法」など、どの教室でも子どもたちが「本物」の素材や技術に触れ、夢中で取り組む姿が見られました

## 3. 参加者評価・改善点・今後の展開

実施後のアンケートでは、大学キャンパスという特別な環境での体験や、学生スタッフが子どもたちに優しく丁寧に関わる姿勢に対し、保護者から高い評価をいただきました。「子どもがのびのびと活動できた」との感謝の声が多く寄せられています。一方で、一部の説明の声かけや、安全面へのより細やかな配慮について改善を期待するご意見もいただき、次回開催への重要な課題となりました。今後はこれらのフィードバックを活かし、子どもたちが探究心を持ち、多様な人との関わりの中で学びの楽しさを実感できる場を提供します。地域と大学が協働し、次世代の成長を支える活動としてさらに発展させたいと考えています。

本イベントは、大学が持つ豊かな自然や人の力を地域へ還元する、「地域にひらかれた学びの場」として大きな役割を果たしています。子どもたちにとっては、「本物」に触れる貴重な原体験となり、教師や保育士を志す学生にとっては、座学だけでは得られない実践的な成長の機会となりました。

準備から当日の安全管理に至るまで、学生が主体的に動き、子どもたちの「やってみたい」という気持ちに真剣に向き合うプロセスは、子どもと活動を共にする際の責任感や、人を支える力を育む「生きた教育」そのものです。地域の方々と大学が手を取り合い、次世代の成長を温かく支え合うこの活動を今後も大切に育んでいきたいと思ひます。



### プロジェクト概要

- 助成  
独立行政法人国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金」
- 協力  
東京家政学院大学 社会連携室
- 担当教員  
生活共創学部 基幹教員
- 学生  
現代生活学部/生活共創学部  
学生 48名
- 実施期間  
令和7年11月29日

 National Institution For Youth Education  
独立行政法人 国立青少年教育振興機構  
「子どもゆめ基金助成活動」

体験の風を  
おこそう

# Case 11

## 神奈川県の実業への協力

# かながわ消費者施策推進指針「わかりやすい版」 作成に関わる意見交換

現代生活学部 現代家政学科

### 神奈川県消費生活部との意見交換

神奈川県は令和7年から令和11年までの5年間の消費者施策の基本方針である「かながわ消費者施策推進指針」を改定しました。その後、その指針が誰にとってもわかりやすく読むことができる「わかりやすい版」を作成しましたが、その過程で現代家政学科の学生が改善に向けた意見交換に協力しました。

現代家政学科の専門科目「総合家政と地域生活」の授業に神奈川県消費生活部の担当者をお招きし、指針の概要や対象となる県民の状況について説明を受けました。「わかりやすい版」の原案にもとづくディスカッションをした後、「わかりにくい箇所はないか」「よりわかりやすくするためにはどのような記載がよいか」といった視点で各自がレポートにまとめ、その内容を担当者と共有しました。

学生のレポートでは「すでに十分わかりやすい内容で、改善点を探すのに苦労した」といった声が多く寄せられましたが、「障がい者、若者、高齢者、さまざまな属性の人達に届くパンフレットを作ることの大変さを学べた」「改善をしていくには、否定的な意見を言い合うのではなく、具体的な改善案を出して皆で共有していくことが大切だと学ぶことができた」といった意見もありました。

現代家政学科では食生活、ハウジング、ファッション、生活者と社会の4領域から構成される総合家政の学びを重視しており、その学びを活かした地域貢献のあり方を具現化する機会となりました。



【参考情報】「かながわ消費者施策推進指針」わかりやすい版  
～指針の内容を広くお知らせするため、わかりやすい冊子にしました～

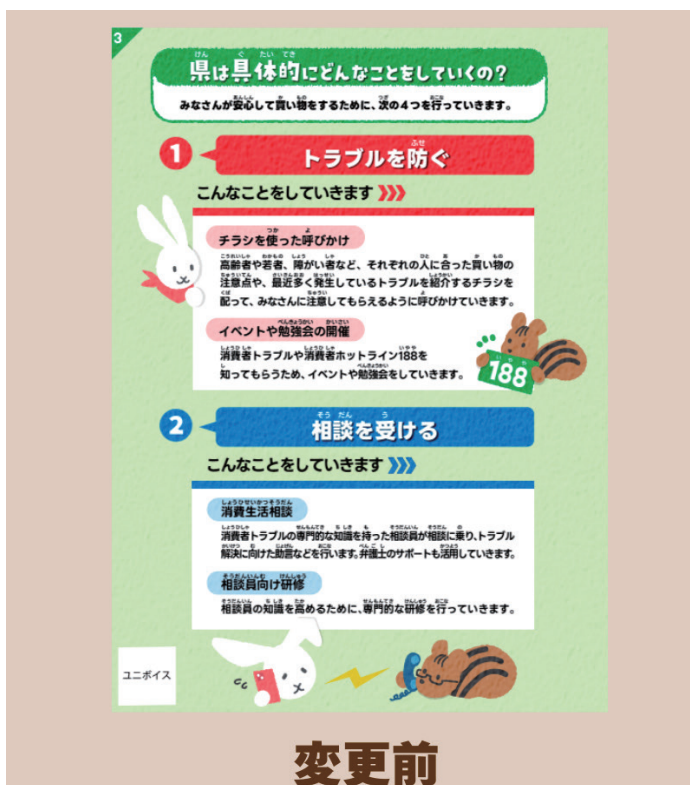


<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/r7b/cnt/f535335/wakariyasuiban.html>

# かながわ消費者施策推進指針「わかりやすい版」の改善

学生の意見を受け、改善された主な箇所についてご紹介します。

- ・表紙で、買い物に関する施策ということが伝わるよう、買い物かご等のイラストが追加されました。
- ・掲載する情報量を絞ったり、ウサギとリスの会話による消費者力の説明内容が見直されました。
- ・具体的な取組を扱ったページでは、啓発イベントの詳細が記載されたWebサイトを閲覧するための二次元コードや、消費者ホットラインである188に電話するための説明が追加されました。(図参照)
- ・全体的にメリハリが出るよう色使いが見直されました。



「わかりやすい版」では、指針のポイントがわかりやすくまとめられ、親しみやすいイラストの4コマ漫画で消費者トラブルになりやすい事例が紹介されるなど、視覚的な工夫がされ、より親しみやすく、受け入れられやすい内容となりました。やさしい言葉を使用し、ふりがなや読み上げ用の音声コードを付けることで、障害の有無だけでなく、幅広い年齢層や外国にルーツのある消費者への配慮となります。今回の取り組みには本学以外にも東洋大学や日本女子大学の学生と、障がいのある当事者も協力しました。学生にとっては生活者の視点から地域生活を考え、家政学や消費者教育の理解を深め、その学びを社会に還元する機会となりました。

### プロジェクト概要

- パートナー  
神奈川県消費生活部
- 担当教員  
現代生活学部 現代家政学科  
教授 小野 由美子
- 学生  
現代生活学部 現代家政学科  
2年生 9名  
4年生 2名 計11名
- 実施期間  
令和7年9月30日～10月7日

# Case 12

## 消費者教育演習における取り組み

### 上級生による新入生を対象にした消費者教育

現代生活学部 現代家政学科

#### 東京都消費生活センターへの訪問と専門家による講義

消費者教育を実践的に学ぶ「消費者教育演習」では、東京都消費生活総合センター等と連携をしながら、ローズ祭の機会を活用する形で、上級生が成人になって間もない新入生を対象にした消費者教育を毎年実施しています。

令和7年度は、5月8日に東京都消費生活総合センターを訪問し、センターの事業概要や消費生活相談員による講義を受け、電話相談を受けている様子や図書資料室も見学しました。

さらに5月22日には「消費者教育とエシカル消費」をテーマに、一般社団法人消費生活総合サポートセンターから専門家を招き、啓発に必要な知識や技術を学びました。



#### ローズ祭での上級生による新入生を対象にした消費者教育の実践

現代家政学科の1年次開講の必修科目「現代家政演習」では、大学における学びを深めるために履修者全員がローズ祭に参加します。2年生以上の消費者教育演習の履修生は、成年に達し契約主体者になって間もない新入生に対して、契約の大切さや、消費者トラブルの対処法などを伝える取り組みをローズ祭で実施しています。正確で分かりやすい情報が提供できるよう、消費者教育演習の履修者には主体的に学ぶ姿勢が求められます。

令和7年度は、新入生を中心とした来場者に、東京都消費生活センターのWeb教材を使って、クレジットカードのリボ払いの返済シミュレーションや、金利の高さを実感してもらう取り組みを実施しました。

さらに、消費者庁が開発した教材とVRゴーグルを使って、消費者トラブルにあう場面を疑似体験してもらいました。



## 啓発事業



左：(公社)消費者教育支援センターの「消費者アクションゲームⅡ」を使って、楽しみながら学習した来場者もいました。

右：東京都消費生活総合センターのキャラクターの着ぐるみを借り受け、職員にご協力を頂き「中の人」にチャレンジした学生もいました。キャラクターと一緒に学内を練り歩き、啓発資料を配布したり、写真撮影に応じたりして、消費者トラブルについて気に留めてもらう人を一人でも増やす工夫をしました。



## 消費者教育の担い手を体験する意義

消費者教育は、教師や講師などの担い手が、生徒・学生や受講生などの受け手に対して、資料やツールといった教材を用いながら、消費生活に関する知識・技術・態度を伝えます。担い手が一方的に働きかけても、受け手がいなかったり、意欲がなければ消費者教育は成立しません。また、単に知識を伝えるだけでなく、受け手の具体的な変化を導くことが重要であり、行動の変容を促すための色々な工夫が求められます。こうした消費者・生活者を対象にした取り組みは、座学だけで完結はしません。また、消費者教育は学校だけでなく、行政も重要な担い手です。消費者教育演習における取組は、教材を提供する担当者にとっても、その反応を直接知ることができる貴重な機会となっています。

### プロジェクト概要

- パートナー  
東京都消費生活総合センター  
一般社団法人消費生活総合サポートセンター
- 担当教員  
現代生活学部 現代家政学科  
教授 小野 由美子
- 学生  
現代生活学部 現代家政学科  
2年生 2名  
3年生 8名 計10名
- 実施期間  
令和7年5月8日～6月15日

## 江戸東京野菜“内藤とうがらし”の活用方法の検討

人間栄養学部 人間栄養学科

### 内藤とうがらしとは

#### 1. 内藤とうがらし復活までの道のり

江戸中期内藤家の領地内に新しい宿場、内藤新宿ができました。周辺で栽培される唐辛子が当時ブームだった蕎麦の薬味として重宝され、江戸中に流通されました。しかし明治以降都市化が進み新宿から内藤とうがらしは消滅。内藤とうがらしプロジェクトでは平成22年から復活を試みはじめ、平成25年には固定種が完成し江戸東京野菜に認定され、平成30年には特許庁の地域団体商標にも登録され新宿の名産品となりました。

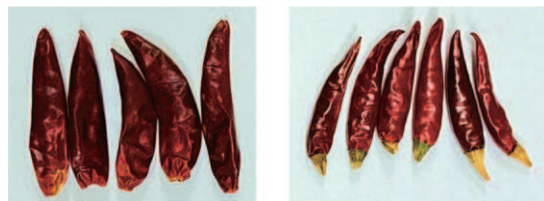
人間栄養学科調理学研究室では、令和5年からプロジェクトチームの一員として活動をさせて貰っており、ここに3年間に渡る学生中心の活動内容をご報告します。活動のスタートとして、プロジェクトリーダーから内藤とうがらしの歴史と復活までの道のりを直接学びました。

#### 2. 内藤とうがらし収穫作業にボランティア参加

唐辛子は交雑が起こりやすく、品種の純粋性を保つために指定農家にて純系を維持しながら栽培しています。夏の収穫の時期に、学生と一緒に収穫ボランティアに参加させてもらいました。

#### 3. 内藤とうがらしを使った商品の市場調査

新宿区内Aデパートの内藤とうがらしフェア(令和5年)、Bホテルで製造・販売されているお菓子(令和7年)、老舗C和菓子店の団子(令和7年)など、学生らと調査に行きました。唐辛子の辛さを生かした料理もあれば、ほんのり隠し味的な活用方法もあり、新宿区を中心に、さまざまな料理やお菓子が商品化されていました。



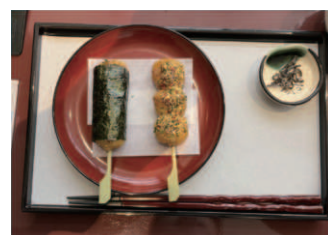
▲左は現在一般的に流通している鷹の爪。右が内藤とうがらし



▲プロジェクトリーダーから講義を受ける学生たち



▲収穫ボランティア▼



▲新宿区内で販売されていた内藤とうがらしを活用した商品

## お菓子への活用の検討

### バターとの相性が良い

取り組み初年度の予備実験において、内藤とうがらしはバターとの相性が良かったため、それ以降バターを使ったお菓子への活用を検討しました。小麦粉に対して何%の使用量が最適か、焼き上がりの色はどうかなど、官能評価や色調の計測などさまざまな評価を行いました。

### フィナンシェ



### パウンドケーキ



### クッキー



### スコーン



## 学園祭での販売とアンケート調査

令和6年、令和7年の学園祭では、学生が考えたレシピの内藤とうがらし入りクッキーを販売しましたが、大人気で兩年ともすぐに完売となりました。また令和6年は来場者にアンケート調査も実施し、75%が内藤とうがらしを知りませんでした。85%が内藤とうがらし入り商品があれば購入したいと回答しました。



当日の様子▲▶



▲販売したクッキー

### プロジェクト概要

- パートナー  
NPO法人おいしい水大使館  
内藤とうがらしプロジェクト
- 担当教員  
人間栄養学部 人間栄養学科  
准教授 大富 あき子
- 学生  
人間栄養学部 人間栄養学科  
4年生  
令和5年度 2名  
令和6年度 2名  
令和7年度 2名 計 6名
- 実施期間  
令和5年4月～令和8年3月

## まとめ

3年間の活動を通して、内藤とうがらしは一般のとうがらしにはない奥深さを持つ素晴らしい素材だと改めてわかりました。一緒に取り組んだ学生たちも、貴重な体験ができました。内藤とうがらしの発展に今後も貢献ができればと思います。

# Case 14

## SDGs×地域連携活動

### フェアトレード商品を活用した共創事業と食育

人間栄養学部 人間栄養学科

#### フェアトレードとSDGs

##### 1. はじめに

人間栄養学部人間栄養学科実践応用栄養学研究室では、令和4年度から千代田区内を舞台にSDGs(持続可能な開発目標)をテーマにした社会活動を行っています。

令和7年度は、大学4年生3名が、若い世代に「もっとSDGsを知って欲しい」、「SDGs活動に参加して欲しい」との思いをもって、フェアトレードをテーマにした活動を企画、運営しました。

##### 2. フェアトレードとは

令和4年度に人間栄養学科に所属する1年生の女子学生を対象に実施したSDGsをテーマとしたアンケート(有効回答数132名)において、「行動したいこと・する予定があること」に対し「節電・節水をする(50.4%)」、「ごみを出さないようにする(38.2%)」に次いで「フェアトレードの商品を購入する(34.1%)」の順に多い回答が得られました。

フェアトレードとは、「公正な貿易」という意味で、途上国など弱い立場にある生産者や労働者が適切な価格で商品を取り引きできるよう支援する仕組みのことです。

フェアトレード基準の要素には経済的基準、社会的基準、環境的基準があり、消費者がフェアトレード商品を選ぶことで生産者の安定的な収入や安全な労働環境の確保、強制労働や児童労働の禁止、環境や生態系の保護にも貢献することができます。つまり、SDGsに貢献する取り組みの一つとして、重要な役割を担っています。

そこで、若い世代の興味関心が高かったフェアトレードをテーマに①「SDGsランチ」の開発、②コーヒーゼリーの販売、③大学1年生を対象にしたSDGsに関する食育を実施しました。

#### 活動の概要

##### 1. フェアトレードのコーヒーを使った「SDGsランチ」の開発

今回の「SDGsランチ」にはフェアトレードの代表的な商品であるコーヒーを用いることにしました。コーヒーには苦味、酸味、コク、アロマなどの特徴があり、食事とともに、あるいは食後に楽しむ飲み物として親しまれています。また、生活習慣病予防などの健康効果についても多数報告されています。今回、ランチメニューの開発にあたっては、コーヒーの新たな魅力を引き出すために「食べて楽しむコーヒー」をコンセプトに料理に取り入れてみることにしました。

完成した「SDGsランチ」は、日比谷パレス（千代田区日比谷公園1-6）にて9月に1か月間販売し、好評を得ました。

## 2. コーヒーゼリーの販売

学園祭（ローズ祭）で、フェアトレードのコーヒーを使ったコーヒーゼリーを製造し、150個全て完売しました。

## 3. 大学1年生を対象にしたSDGsに関する食育

人間栄養学科に所属する1年生70名を対象にフェアトレードをテーマとした食育を行いました。食育後のアンケート結果から、社会貢献したいと思った学生が増えました。しかし「方法が分からない」といった回答から、SDGsに取り組む行動に繋がりにくい要因があることが分かりました。



人間栄養学部人間栄養学科  
実践応用栄養学研究室

コーヒーゼリー

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

1個200円

おいしく食べて  
SDGsに貢献

販売場所  
1302

## まとめ

今回の調査から、SDGsへの関心は高く、特に日常生活の中で身近に行える社会貢献活動については意欲が高いことが分かりました。食育を通してSDGsに貢献したいと思った人が90%以上を占めたものの、「方法が分からない」や「忙しい」といった回答から、SDGs活動を促進させるにあたり課題が認められました。このことから、一緒に活動する仲間づくりの場の提供や、イベントを一緒に企画するといった支援が必要であると考えられました。さらに、SDGs活動にともなう達成度を見える化することも活動促進の要素になります。

一方、見た目が美味しそうであればSDGsに関係なく購入する動機になることが認められました。私たち栄養の専門家は、「おいしいものを提供する」という本来の役割を通じて、人々が自然とSDGsに参加できるきっかけを提供できると実感しました。

### プロジェクト概要

- パートナー  
日比谷パレス
- 担当教員  
人間栄養学部 人間栄養学科  
准教授 加藤 理津子
- 学生  
人間栄養学部 人間栄養学科  
4年生 3名
- 実施期間  
令和7年6月～10月

## 東京家政学院大学 地域交流会2025 開催報告

社会連携センター

### 目的

本学では、企業、自治体、教育関係、団体、地域等の方との交流と、本学の地域連携活動に関する情報発信の機会として、平成19年度から年1回、「地域交流会」を開催し、当年度の活動について、学生または教員による事例発表を行っています。

### 地域交流会2025開催概要

- 日 時 令和8年2月2日(月) 13時00分～15時30分
- 場 所 東京家政学院大学 町田キャンパス
- 主 催 東京家政学院大学 社会連携センター
- 共 催 西武信用金庫

#### 1. 開会のことば

東京家政学院大学 町田社会連携センター長

#### 2. 挨拶

東京家政学院大学 学長

西武信用金庫 地域協創部 副部長 様

#### 3. 社会連携センターについて

東京家政学院大学 副学長

#### 4. 連携事例発表

- (1)第7回ものづくりチャレンジ大作戦に参加して
- (2)メカブ撮取がヒト腸内細菌叢、便通、およびQOLに及ぼす影響の検討(計画)
- (3)八王子市の地域連携による健康志向型かき氷のメニュー開発
- (4)さがみはら環境まつり

#### 5. 連携事例パネル展示(14件)

交流会&連携相談対応

#### 6. 閉会のことば

東京家政学院大学 町田社会連携センター長



広報ポスター

## 当日の様子

当日は、19の企業、自治体、大学、高等学校、団体から29名の参加がありました。学内からは、主催となる社会連携センターの町田キャンパス委員、並びに事例発表、パネル展示説明などで協力された教員・学生の参加のほか、日頃、様々な連携活動を行っている教員なども参加しました。終了時間まで和やかな雰囲気の中、大学と参加者、参加者同士で三々五々、交流を図りました。また、新規や継続に繋がる連携の相談もされ、とても有意義なイベントとなりました。



## 令和7年度 公開講座 開講報告

社会連携センター

### 8講座を開講 受講者数 のべ157名

公開講座は、町田キャンパス、千代田三番町キャンパスを会場に、講師となる教員の研究や学科の特色をいかした講座を実施しています。令和7年度は、4学科で計8講座を開講しました。申込者は300名超、受講者数はのべ157名となりました。



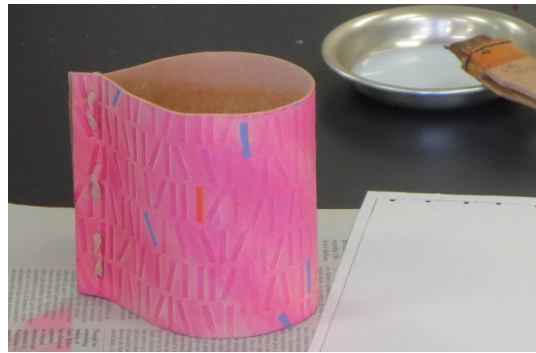
各キャンパスの公開講座ポスター

町田	生活共創学科	澤田雅彦 准教授	ものづくり体験講座(木のカタリリーレストづくり)
		佐々木麻紀子 助教	ものづくり体験講座(皮革造形講座)
	こども教育学科	末松加奈 准教授	不思議なスライムを作ろう!
千代田三番町	現代生活学科	井澤尚子 教授/太田茜 助教	色のイメージを活用したアクセサリー
		伊藤有紀 准教授	江戸時代の料理を作って食べよう
	人間栄養学科	林一也 教授/綿貫仁美 助教	食品と加工の講座一味噌造り・肉類の加工(ポークソーセージづくり)
		山田光彦 教授	脳の不思議—我々が感じている世界は本当に現実なのか?
	門之園知子 非常勤講師	日本の伝統調味料、醤油を使った簡単スイーツを作ろう!	

## 町田キャンパス 2学科3講座

生活共創学科からはふたつの「ものづくり体験講座」を開講しました。「木のカトラリーレストづくり」は、それぞれが選んだ端材を一日かけて手作業で削り、最後にえごま油を塗って仕上げました。「皮革造形講座」では、初めて触れる皮や専用の器具に小中学生の参加者は興味津々でした。

こども教育学科の「不思議なスライムを作ろう！」では、光るスライムや色が変わるスライムに、子ども達が歓声を上げていました。



## 千代田三番町キャンパス 2学科5講座



「色のイメージを活用したアクセサリ」(現代家政学科)は、2回連続講座。色のイメージの講義を聞いた後、伝統の組紐の技法を用いて、それぞれのイメージでブレスレットを仕上げました。

「江戸時代の料理を作って食べよう」(現代家政学科)には、夏休みということもあり、たくさんの親子が参加して料理を作りました。



「食品と加工の講座」(人間栄養学科)は毎年募集開始後すぐに定員を超えてしまう大人気の講座。同じ班の人たちと協力しながら味噌を仕込みました。



「脳の不思議」(人間栄養学科)では、「脳がだまされる」という不思議な体験をしながら講座を楽しみました。

「日本の伝統調味料、醤油を使った簡単スイーツを作ろう！」(人間栄養学科)では、さまざまな種類の醤油について、製法の違いなどを学んだ後、色や味の比較をし、異なる醤油を使ってスイーツを作って食べ比べをしました。



どの講座も受講者の満足度が高く、また受講したいという感想が多く寄せられました。



## 東京家政学院大学地域連携ポリシー

東京家政学院大学は、建学の精神である「KVA精神」（知識の啓発・徳性の涵養・技術の錬磨）に基づき、生活者の視点から、家政学を中心的な学問分野として教育・研究を行い、個人・家庭・地域の豊かな暮らしはもとより、地球規模の問題解決に貢献できる人材を育成し、社会に送り出すことを目指している。

本学が中心的に取り扱う家政学の分野は、地域社会（Community）との関わりの強い学問分野であり、それゆえ、本学における教育・研究活動にあたっては、地域社会との連携が不可欠である。また、その成果は、人々の暮らしや文化の発展・向上に寄与するものである。

本学では、こうした学問分野の特長を踏まえ、地域社会への貢献を教育・研究に続く第三の使命と位置づけ、その実現のために、ここに地域連携ポリシーを定める。

- 1 大学は地域社会の一員であること、また本学の発展・成長は地域社会とともにあることを共通の理解として自覚し、地域連携活動を推進する。
- 2 地域社会との連携を推進することにより、研究活動の充実と成果の蓄積を図るとともに、実践的な教育機会の創出に務め、社会に貢献する有為な人材育成を目指す。
- 3 教育・研究活動の成果を積極的に地域社会に還元し、人々の暮らしや文化の発展・向上に貢献する。

（平成23年4月1日制定）

東京家政学院大学では、地域貢献を教育、研究に続く第三の使命と捉え、地域連携活動を積極的に推進しています。これまでに衣、食、住、デザイン、防災、児童、福祉など、生活学に関わるさまざまな分野で地域の方たちの協力を得て連携活動を進めてきました。

ところで、本学の地域連携の特徴のひとつは、学生が主役となって進めて行くということです。授業を通じた連携はもちろん、連携研究においても教員の指導のもと、学生が主体的に関わります。このことは、本学が地域連携を単に地域貢献の機会と考えているのではなく、教育研究活動を充実させるための機会ととらえていることを示しています。

大学の教育研究活動が充実し、学生の力量や研究レベルが向上すれば、自ずと地域貢献できる可能性は高まります。本学では地域連携活動は、大学から地域への一方通行ではなく、教育研究の充実が地域貢献に繋がり、また、地域貢献が教育研究の充実に繋がるという好循環を生み出す仕組みと考えています。そのため、地域連携活動と教育研究活動は密接に結びついており、自ずと学生が主役になります。

このような本学の地域連携活動の特徴を踏まえ、本報告書では、活動に参加した学生の活動を中心にご紹介しています。それぞれのプロジェクトにおいて学生の成長が、結果として地域貢献に結びついており、学生の成長と地域貢献という一見無関係に思える両者が、実は密接に繋がっていることがわかります。

本報告書により、地域の皆さまには、本学の地域連携の特徴をご理解いただき、今後ともお力をいただきたくお願いいたします。また、学生の皆さんにおいては、地域連携活動に積極的に参加し、それぞれに大きな成長の機会を得ることを願います。

令和8年3月  
東京家政学院大学  
社会連携センター

# ACCESS MAP



## 町田キャンパス

生活共創学部 生活共創学科 こども教育学科



〒194-0292 東京都町田市相原町2600

- 相原駅(JR横浜線)下車、バス「相原駅西口(のりば2番)」から「東京家政学院」行乗車、約8分、バス「相原駅西口(のりば1番)」から「大戸」行または「法政大学」行※で「相原十字路口」下車、徒歩約10分 ※急行を除く。

※バス時刻は神奈川中央交通の時刻表をご確認ください。

## 千代田三番町キャンパス

現代生活学部 現代家政学科 人間栄養学部 人間栄養学科



〒102-8341 東京都千代田区三番町22

- 市ヶ谷駅(JR中央線・総武線、東京メトロ有楽町線、東京メトロ南北線、都営地下鉄新宿線)下車、徒歩約8分(地下鉄A3出口)
  - 半蔵門駅(東京メトロ半蔵門線)下車、徒歩約8分(5番出口)
  - 九段下駅(東京メトロ東西線、都営地下鉄新宿線)下車、徒歩約12分(2番出口)
- ※駐車場はございませんので、公共交通機関をご利用ください。

## 令和7年度 地域連携活動報告書

発行日 令和8年3月31日

## 発行 東京家政学院大学 社会連携センター

(町田) 〒194-0292 東京都町田市相原町2600番地  
TEL 042-782-9811(代表) TEL 042-782-9838(直通)

(千代田三番町) 〒102-8341 東京都千代田区三番町22番地  
TEL 03-3262-2251(代表)

